

マタイによる福音書5章5節 「柔和な者」

1A 「心貧しい者、悲しむ者」の次の段階

1B 神との内的な関係

2B 人に対する自分の姿勢

2A 柔和な者の手本

1B 旧約聖書

1C アブラハムの譲歩

2C モーセの謙遜

3C ダビデのサウルへの態度

4C エレミヤの受けた冷笑

2B 新約聖書

1C ステパノによる赦し

2C パウロの受けた苦しみ

3C 主イエスご自身

3A 柔和という性質

1B 御霊による品性

2B 権威との両立

3B 誇りを感じない自分

4B 復讐心の反対

4A 地の相続

1B 満足した心

2B 御国の相続

本文

マタイによる福音書5章を開いてください、私たちの山上の垂訓の学びは、八つの幸い、八福の三つ目の「柔和な者」に入ります。「5:5 **柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐからです。**」この三つ目の幸いも、先の二つの幸いと同様に、あまりにもこの世の考えとかけ離れているので、度肝を抜くような発言です。地を受け継ぐ、つまり、自分のものとしていくためには、その人は柔和とは裏腹の、武力、権力、政治力、発言力、支配力など、あらゆる「力」を行使して、人々を自分に従わせることによって獲得することができます。ところが、柔和とは全くその反対の姿勢であります。

ユダヤ人にとっても、イエス様のこの宣言は衝撃的でありました。ローマ帝国があり、自分たちが異邦人に虐げられているのであり、メシアがローマを力をもって打ち砕いてくださると信じていた

からです。キリスト教会においてでさえ、力で動いている時はないでしょうか？雄弁に、面白く話しをしてくれる人のところに、人々が集まります。雄弁であること自体は悪いことではないですが、雄弁だから集まっているということはあるでしょう。財政力があってすばらしい教会堂があり、そこであれば多く人々が集い、さらにお金が集まります。しかし、主はその反対のことを話しておられます。その反対のところに、むしろ天の御国の広がりがあるというのです。

1A 「心貧しい者、悲しむ者」の次の段階

ところで、私たちが山上の垂訓を読む時に気を付けなければいけないのは、イエス様が弟子たちに、また群衆たちに生の声で語りかけ、教えられているということです。私たちが聖書の紙面を開くようなかたちで読んでいません。ですから、イエス様が語られたとおりに聞いて行っています。つまり、順番が大事だということです。「3 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。4 悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるからです。」と聞いた後で、この柔和な者は幸いです、という言葉聞いています。この二つの幸いがある、その自然の帰結として、「柔和な者は幸いです」となっています。

1B 神との内的な関係

心の貧しさというのは、自分には全く良いものがない、自分には自分を救うべき理由や原因が全く無い、災いだ、私はもうだめだ、という神の前での圧倒的な絶望感です。これまで存在していた、自分が自分を成り立たせる力というものが、神に真実に出会うことによって、全くなくなってしまったようになります。これが、心の貧しい者です。そして神に出会って、自分の内に何も良い物がないとわかると、次に「悲しむ者は幸いです」とあります。罪に対する悲しみです。自分の罪を悲しみ、また人間が圧倒的に神の前で罪深いことを知って、その状態を由としないということで、悲しみが心の中にあります。

2B 人に対する自分の姿勢

そしてイエス様は、「**柔和な者は幸いです。**」と言われます。心貧しさと悲しみというのは、もっぱら神との自分との間のことであります。神と自分の中での内側のことでした。しかし、柔和な者というのは、そうした自分自身の状態が、他の人に知られるようになってもそれでもその状態を保っているということです。「へりくだった者」と言いかえることもできます。神からの取り扱いだけでなく、他の人たちからの仕打ちがあっても、それでも自制した自分自身を保っていることができている状態です。私たちは何を行なっているか？よりも、どのように反応しているか？で、自分が何を本当に思って、考えているかが明らかにされるとよく言われます。前もって行うことについては、ごまかすことができるかもしれませんが、反応はごまかす時間がないからです。柔和な者というところから、純粋に内側ではなく、外側との接触の中で現れている姿勢です。

2A 柔和な者の手本

それでは、柔和な人とは具体的にどのような人のことでしょうか？聖書には数多く、その手本となるような人々が出てきます。

1B 旧約聖書

1C アブラハムの譲歩

旧約聖書では、アブラハムのことを思い出してください。アブラハムがベテルとアイの間に天幕を張って羊を飼っていましたが、甥のロトも自分の羊や牛を飼いながら天幕に住んでいました。すると、場所が狭くなって、アブラハムの羊飼いたちとロトの羊飼いとの間で争いが起こりました。アブラハムが伯父で、ロトは甥です。譲るのは当然、ロトということになりましたが、アブラハムはロトに譲りました。「13:8-9 私とあなたの間、また私の牧者たちとあなたの牧者たちの間に、争いがないようにしましょう。私たちは親類同士なのだから。全地はあなたの前にあるではないか。私から別れて行って欲しくないか。あなたが左なら、私は右に行こう。あなたが右なら、私は左に行こう。」

2C モーセの謙遜

モーセにも同じような姿勢が見えました。彼は、姉ミリアムに自分の妻がクシュ人だとして非難を受けました。そして、「主はただモーセとだけ話されたのか。われわれとも話されたのではないか。（民数 12:2）」と言いました。これは、主に立てられているモーセに対する侮辱と中傷です。ところが、モーセは言い返しませんでした。「モーセという人は、地の上のだれにもまさって柔和であった。（12:3）」とあります。アブラハムもそうでしたが、モーセも「わたしのしもべ」と神は呼ばれています（12:7）。神に対して僕である人が、人に対しても争わない姿勢を貫いています。

3C ダビデのサウルへの態度

そしてダビデも、神から「わたしのしもべ」と言われた人です（2サム 2:18 等）。ダビデは、主によって油注がれ、神に選ばれた王となることは知らされていましたが、それにもかかわらず、王であるサウルに対して歯向かうことはありませんでした。サウルは、ダビデを殺そうとして冷酷な扱いをしていったのにも関わらず、彼は歯向かいませんでした。いや、逃げている時にむしろサウルに手を下すことができる機会があったのに、それでも「主に油注がれた方に手を下すことは、決してできない」と言って、部下たちが殺そうとするのをやめさせたほどでありました。彼は、決して自分で復讐することを行わず、むしろ行った者たちを死刑に定めるという徹底ぶりでした。彼はユダの王になり、それから北のイスラエルを含めた統一イスラエル王国の王となりましたが、そのために一度たりとも相手に敵対して権力を得たのではありません。

4C エレミヤの受けた冷笑

預言者では、エレミヤは柔和な人でした。彼は、全ての人がバビロンに対抗しようとしている時に、自分だけがバビロンに服しなさいという神の言葉を伝えました。祭司や偽預言者は、ユダはバビロ

ンから解放されると伝えていたのです。エレミヤは、暴力を振るわれ、脅され、冷笑されていました。それにも関わらず、彼は耐え忍び、同じ使信を宣べ伝えていたのです。

2B 新約聖書

1C ステパノによる赦し

新約聖書においては、どうでしょうか？ステパノのことを思い出します、彼は主の言葉を伝えた時に、聞いていたユダヤ人の心にのこぎりが引かれたようになりました。彼らは怒り、怒っただけでなく石打にしていっていったのです。石で打たれて死のうとしていたステパノは、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。(使徒 7:60)」と祈ったのです。

2C パウロの受けた苦しみ

そのステパノの殺害に同意していたパウロはどうでしたでしょうか？この道を信じる者たちを片っ端から捕縛した彼は、ダマスコに行く途上でイエス様に会いました。それから、彼は 180 度転換し、イエスが主であることを宣べ伝えました。そのために、彼がどれほど苦しんだことでしょうか。死の危険を何度も通りました。そして、教会の人々でさえ、彼に対して批評し、批判し、中傷していた人々がいました。けれども、パウロはそれらを取るに足りないこととして、主によって与えられた愛を、心を広げて最大限に示しました。(コリント第一と第二)パウロは、何度となく柔和さや謙遜を身につけなさいということを話しました。「謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに耐え忍び、平和の絆で結ばれ、御霊による一致を熱心に保ちなさい。(エペソ 4:2-3)」そして、彼自身がそれを実践していたのです。「私は、ユダヤ人の陰謀によってこの身に降りかかる数々の試練の中で、謙遜の限りを尽くし、涙とともに主に仕えてきました。(使徒 20:19)」

3C 主イエスご自身

そして何よりも、私たちの主イエス様ご自身が、柔和な方でした。「マタ 11:29 わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。」このように言われたように、イエス様は近づきやすい人でありました。大勢の病んでいる人たちがイエス様のところに来て、癒されていきました。「イザ 42:3 傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともなく、真実をもってさばきを執り行う。」このように人々に対して柔和さを示しておられました。しかし、それ以上に父なる神に対して、全てをお任せになったところに柔和さが現れています。「ヨハ 14:10 わたしがあなたがたに言うことばは、自分から話しているではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざを行っておられるのです。」ご自分からのことを話さずに、父から言われたことだけを語り、父が行われていることだけを行うというところに、自分がないというか、すべてをゆだね切ったお姿を見ることができます。

そして何よりも、ピリピ書 2 章の中に、柔和さやへりくだりの全てを言い表した言葉があります。「ピリ 2:6-8 キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、

ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」

3A 柔和という性質

ところで、私たちはしばしば「あの人は、とても柔和な人だ」というような言い方をします。その時に、果たして本当に、イエス様の言われているところの柔和なのか？と吟味してみないといけません。なぜなら、もう一度繰り返しますが、心の貧しさがあって、罪に対する悲しみがあって、その後に出て来る実が柔和なのであって、そうでなければ柔和のように見えても、聖書が定義するそれではないということです。

1B 御霊による品性

柔和というのは、御霊による実の表れであります。「ガラ 5:22-23 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものに反対する律法はありません。」ですから、御霊によって生まれたからこそ与えられる性質であり、生まれつきの元々の性格や性向のことを「柔和」と呼ぶことはできないのです。そのような気性があるかないか、ということではなく、キリスト者となり、御霊によって変えられていく中で与えられる品性だからです。

そこで先ほど挙げた、柔和な人の例をもう一度あげてみましょう。ダビデは柔和な人だと言いましたが、彼がいかに力強い人であったかは知っていますね。戦いの人であり、あのゴリアテと対峙した時を初め、ペリシテ人には気丈に戦いました。とても意志が強く、自分で下した判断はそう簡単に曲げることはしませんでした。そうした彼の気質の中であっても、御霊によって彼はサウルが自分の隠れていた洞窟で用を足していても、主に油注がれた方に手を下すことはあってはならないと心を痛めたのです。

エレミヤもそうですね、彼ほど大多数の流れに逆らって預言をした人はいません。どんなに迫害され、中傷を受け、冷笑されても、それでも御言葉を伝えていったその忍耐深さに柔和さが現れています。彼はどんなに大勢が右だといっても、左だと大胆に宣言する勇気がありました。けれども、そうした反対に会ってもその大胆が落ち込みや自己憐憫に変わることはなかったのです。

パウロは、意志の強い人でした。彼は、御霊に禁じられない限り、ヨーロッパへの宣教に呼ばれていくことはしませんでした。非常に意志が強いのに、それでも人々から難癖が付けられても、それを一向に考慮することをしないほど、品性が練られていました。

2B 権威との両立

そして柔和ということで、しばしば誤解されるもう一つの例は、それがただ軟弱なだけだということです。人づきあいがうまい、何を言ってもにこにこ頷いている、優しい、どの人もこの人につい

では悪く言わないというような時に、それが柔和だということでは全然ないことは知っていくべきです。相手に対して真実を曲げてまで合わせることは、柔和だということでは全然ありません。イエス様は、そういう定義では全然柔和ではありませんでした。「マタ 10:34 わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っははいけません。わたしは、平和ではなく剣をもたらすために来ました。」家族の間に分裂が起こるようなことになるそのイエス様が、人間的な意味での柔和な方ではなかったことは明らかです。

柔和というものと、権力は両立します。柔和でありながら、力ある業を行うことはあり得ます。モーセがミリアムから中傷された時に、主ご自身が会見の天幕に栄光の姿で現れ、それでミリアムが一週間、らい病を患いました。モーセはミリアムに主張も何もしませんでした、モーセを通して中傷したことに対する仕打ちをミリアムは受けました。柔和であることは、真実に逆らうことはしないのです。殉教者は、迫害をする者たちに仕返しすることは決してないですが、それは受身ではなく、むしろキリストを主とあがめて、決してそこからぶれることはない確信が与えられています。

3B 誇りを感じない自分

柔和というのは、先ほど話しましたように、もっとへりくだりに関わっているものです。神に対する自分自身の態度を、他の人の前でも表現することです。自分の罪深さを自覚しているのであれば、自分自身が他者に対しても取るに足りないものであると素直に認めることができる力です。自分は良く見せなければいけないというのが、この世の教えですが、キリスト者はありのままにいればいいと教えます。イエス様は偽善を最も嫌われます。そこには、きれいなように見せていながら、実はうちは汚れているということがあるからです。「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが、決してあってはなりません。(ガラテヤ 6:14)」

ですから、自意識過剰にもなりません。一見、優しく、柔和に見えるような人には、その生まれつきの性質のままでは、裏には自意識が強いということがあります。それは、まさに自分自身を高く評価していることの裏返しでしかありません。自己という名のつく者は、何でも自分中心だし、高ぶっています。自己憐憫はそうでしょう。自分の高ぶりや自尊心を保っておきたいから、何とかして人には良くしておこうと思っています。これは、恐れから来ている、限りなく自分を守るために行っている行為です。けれども柔和な人は、主が守ってくださることを信頼して、自分自身を敢えて守らない人です。自分のことで悲しむことすらやめます。主のことで自分を悲しむことはありますが、主がヨシュアに、アイの攻略で失敗して嘆いていた時に、「祈るのはやめよ、立ち上がれ」と言われたのと同じです。

4B 復讐心の反対

そして柔和というのは、復讐することと反対の姿勢です。柔和の言葉のギリシア語の反対語が、復讐です。ですから復讐しないということが、柔和だということです。先ほど話したように、ダビデが

サウルに対して決して復讐しなかったようにすること、これは柔和な姿勢であります。イエス様に見られた姿勢です。「Ⅰペテ 2:21-23 このためにこそ、あなたがたは召されました。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった。」

4A 地の相続

1B 満足した心

そして、柔和な者たちに約束されていることが、「**その人たちは地を受け継ぐからです。**」であります。もう既に、その人は受け継いでいるものがあります。それは、満ち足りた心でしょう。主によって与えられ、そこで満ち足りているということです。「ピリ 4:11-12 乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満足することを学びました。私は、貧しくあることも知っており、富むことも知っています。満ち足りることにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」こういったパウロは、自分は何も持っていないようにも、実は多くを持っているという境地を言い表していました。「Ⅱコリ 6:10 悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持っていないようでも、すべてのものを持っています。」

2B 御国の相続

そして、もちろん「**地を受け継ぐ**」というのは、将来のことも指しています。後に受け継ぐ神の国のことを指しています。私たちが忍耐して、忠実に主から命じられていることを行なっていくなかで、主が大きなものを後に任せてくださるということです。自分でそれを得ようとするならば、持っているものも失われます。けれども、福音のためにむしろ、小さなことに忠実であれば、主がそれを増し加えてくださるのです。「ロマ 8:17 子どもであるなら、相続人でもあります。私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。」苦しんでいるから、それに耐え忍んでいるから、キリストと共に相続するのです。そして、テモテには、「Ⅱテモ 2:12 耐え忍んでいるなら、キリストとともに王となる。」と言いました。共に苦しんでいるからこそ、共に王となるのです。

私たちは、自分で自分を柔和にすることはできません。聖霊によってのみ、柔和になることができます。聖霊によって明らかにされて、心貧しくし、悲しみ、そしてその後で柔和になることができます。ですから大事なものは、主ご自身を見つめ、この方の言葉を思い巡らし、その中に生きることです。